

西尾実と道元 (XI)

杉 哲

Nishio Minoru and Dohgen (XI)

Satoru SUGI

(Received October 1, 2012)

1. 「否定」思惟の発見

西尾実において、その思惟様式のなかに「否定」という考え方が登場するのは、調べ得た範囲では、「道元禪師」(『信濃教育』大正3年4月号)が、最初であった。西尾実は「道元禪師」のなかで、こう述べていた⁽¹⁾。

彼(道元—引用者注)の道は調和にあらず、妥協にあらず、論議にあらず、空想にあらず、実に切々たる内実の経験を経て否定の一閃に到達し、全き否定の後超関体達の真面目に参し得たものである。而も此際に於ける彼の否定は所謂空零なる否定ではなかつた。即ち真の超越であつた。見神の事実であつた。懷疑の面帕を去つて正覚に入るの第一歩であつた。仮迷を去つて真悟に就くの関門であつた。

「調和にあらず、妥協にあらず、論議にあらず、空想にあらず」と否定辞が重ねられていく。そして、遂には「否定の一閃に到達し、全き否定の後超関体達の真面目に参し得たものである。」にいたる。ここには、ことば本来の意味において「弁証法」とよぶ思惟の姿がある。というのも、「否定的媒介」を契機として、「発展」があると考える見出せるからである。ここには、また、「真の超越」という表現がある。「真の」という冠詞は、「全き否定」という叙述と呼応して、弁証法に立つ超越論であることをより際だたせている。

「超越」という考え方、それ自体は、すでに早く、西尾実の飯田時代(明治43年4月～明治45年3月)に認めることができた⁽²⁾。だが、そこには「没我」という自己否定を契機とする自他融合の発想はみられたものの、「否定」という概念を媒介にする考え方はなかつた。大正3(1914)年の「道元禪師」において、西尾実の著作上、初めて「否定」が姿を現したのである。調べ得た範囲では、西尾実の場合、「道元禪師」にいたるまで「否定」の思考に出会うことはなかつた。その意味において、西尾実における「否定」思惟の発見

であつたといえる。

では、西尾実は、いつ、どのようにして「否定」に出会つたのだろうか。西尾実の論考「道元禪師」は、雑誌『信濃教育』の大正3年4月号に掲載された。「否定」との出会いは、おそらく本論考以前であつたろう。その時期は、いつだつたのか。また、その経緯は、どのようなであつたのか。時期と経緯の特定を求めて、さらに検討を続ける。

2. 「西尾理論の発展系流」と「否定」思惟

「否定」の考え方は、「超越」論に止まらない。西尾実国語教育論の形成と発展の上に、大きな働きをすることになる。西尾実国語教育論の形成と発展を見通すとき、「発展系流」⁽³⁾という視点が有効である。「西尾理論の発展系流」は、「国語教育史論」、「国語教育学論」、「言語文化教育論」、「言語生活教育論」、「文章表現教育論」、「国語教育教材論」、「国語科授業論」、「国語基礎能力論」の八つにまとめられている⁽⁴⁾。このなかから、事例をいくつかとりあげて、「否定」の考え方の在り様を確かめておこう⁽⁵⁾。

まずは、「国語教育史論」の「系流」に属する論考からみてみよう。

明治末年に於ける教授法研究時代が教材研究時代に交替したのは、教授法の如きは単なる末技に過ぎないので、教材に精通することこそ教授を有力ならしめる根本であるといふ否定によつたものであつた。更に、その教材研究時代が指導研究時代に交替しようとして来たのは、真の方法は教材研究のうちに会得せられるといふ第二期の思潮は、あくまで上からの指導で、児童・生徒の学習そのものが要求し来つた問題に対する啓発であり、その発展であるべき指導としては、それではまだ十分であり得ないといふ建前から、いはば下からの指導を樹立しようとする

る立場であつて、これまた、上からの指導に対する否定的発展として跡づけられるべき関係に立つものである。そこに第三期としての指導研究の史的地位の存することが自覚せられなくてはならない。私がここに問題にしようとしている指導研究は、叙上のやうな史的地位に立つ関係上、それは教材研究の発展としての指導研究であり、更にいへば、教材研究が尽された上に、最早単なる教材研究ではないといふ立場に出た指導研究でなくてはならない。換言すれば、教材研究に対する否定を含んだ発展でなくてはならない。

しかるに、その教材研究は、更に作品研究をその根底としたものでなくてはならない⁽⁶⁾。

ここには、わが国の近代国語教育の歴史展開が問題史の立場に立って、記述されている。史的展開は、「否定的発展として跡づけられるべき関係に立つもの」という立場によつてゐる。

つぎに、「言語文化教育論」の事例をみてみよう。

作品研究の方法体系をとりあげる。周知のように、作品研究の方法は、鑑賞・解釈・批評の三相構造によつて体系化されている。その際、体系化の原理として選ばれたのが、「否定的発展」という否定的媒介の考え方であつた。

文芸作品の研究における解釈は、鑑賞から研究へという方向をたどるばあいにおける、研究の第一歩としての位置を占めるいとなみである。注釈が鑑賞への準備であつたのとちがい、これは、鑑賞からの発展として、鑑賞活動の否定を契機とした知的考察の第一歩である。これを研究の第一歩であるとするのは、その考察が、受身であつて、あるものを、あるがままに受取る働きをその本領としているからである。研究の研究たるゆえんは、さらに進んで、そういう解釈を超え、解釈活動の否定を契機とした批判にある。しかし、その批判を真の批判たらしめる前提は、この解釈である。解釈は、鑑賞の否定的発展であり、批判の前提的基礎づけであるところに、その位置が見出される研究部門であるとしてよいであろう⁽⁷⁾。

「否定」による「発展」の相のもとに文芸作品をとらえる考え方は、他にもみることができる。たとえば、「世阿弥の芸術論に於ける大衆的傾向」(『国文学誌』昭和6年10月)において、西尾実は「彼(世阿弥—引用者注)は常に、個に徹することによつて普遍を得、深く達することによつて平明に出で、根本を究めることによつて枝葉を生かさうとする。そして概念としては明らかに対立し、矛盾するものを総合と調和に置か

うとする。しかもその総合調和は、実践的根本的に深く徹することによつてのみ実現される止揚統一として求められてゐる。」(14頁)と述べている。

また、「『つれづれ草』作者の人間観と教育の問題」(『日本文学の本質と国語教育』岩波書店 昭和10年3月10日)では、「各段階の媒介関係」に立つ否定の論理が強調されている。

『つれづれ草』の作者は、人間のもっとも普遍的な態度として、道念のために恩愛の絆を否定すべきを説くとともに、ある場合には、恩愛の情を価値的に肯認し、また、ある場合には、その否定を否定している。しかも、この肯認と、否定と、否定の否定とが、価値的発展として定位されている。すなわち、彼は、まず、素朴な人間性における恩愛の情を認め、その上に道念を—彼はこの段階の人を「道人」といい、「知者」という—、さらにその上に、人間的至情を—彼はこの段階にある人を「まことの人」と呼ぶ—求めていると見ることができる。しかも、その関係は、恩愛の情の否定として道念が成立し、さらに道念の否定として人間的至情が成立するとす点において、絶対否定による発展であるとしなくてはならない⁽⁸⁾。

「その関係は、恩愛の情の否定として道念が成立し、さらに道念の否定として人間的至情が成立する」のようによつて、まず「情」の段階が否定され、「道念」の段階に進むも、それもまた否定される。否定の後に、はじめのあり方にもどる。否定が二回くりかえされる。否定の否定は「はじめから各段階の媒介関係」が前提になっている。しかも、「各段階の媒介関係」は「絶対否定による発展であるとしなくてはならない」と「絶対否定」のことばが選ばれているように、不連続の連続であるという否定の自覚が叙述の前面に打ち出されている。

最後に、「国語科授業論」の事例をみてみよう。なかでも、その中核を占める国語教師論の場合をとりあげる。「伝統的師道の発見は、(甲)の現実的立場と、(乙)の理想主義的立場との総合的発展ともいふべき(丙)の止揚的創造の一発展たるところにその史的意義が存するといつてもよいかと思はれる。」に端的にあらわれているように、ここでも否定的媒介による「発展」が図られている。

今にして思へば、当時(「三人の教育者」大正7年—引用者注)にあつては、伝統的師道に立つ教師といふやうな類型は当時としては目立つた存在ではなかつたし、若し存在しても私の理解の中へは入つてこなかつたであらう。随つて、(甲—法規遂行者としての教師)が(二)の現

実的内容を立場とする教師であり、(乙—自己の信念・趣向の伝播者としての教師)(丙—児童・生徒の個性伸張者としての教師)が共に(三)の止揚的創造を立場とする教師であつたことはいふまでもない。けれども、そこには未だ伝統的な立場と、現実的な立場との対立が意識されていないから、(乙)も(丙)も止揚的意義の確立はなかつた。むしろ(乙)は現実的立場の反立であり、(丙)は(甲)(乙)の総合的發展であつたといふのが当時の真相であつたであらう。随つて、その観点から推せば、伝統的師道の発見は、(甲)の現実的立場と、(乙)の理想主義的立場との総合的發展ともいふべき(丙)の止揚的創造の一発展たるところにその史的意義が存するといつてもよいかと思はれる⁽⁹⁾。

「否定」の考え方は、このように、西尾実国語教育論において重要な役割を果たしている。それだけに、西尾実における「否定」の発見は意義深いものがある。つぎに掲げる先行研究によると、西尾実自身も、「自己の認識方法について、『観念的弁証法』であると語っていたという」。そうだとすると、「否定」思惟は、西尾実にとって、自覚的な営為であつたということになる。

「三」という数字や「三段階」でもって、さまざまな現象や状況をとらえていくことは一般によくされることである。とりわけ、西尾はこの三段階による認識パターンをよく使っている。例えば、明治以降の国語教育史を「第一期語学教育的教授法期 第二期 文学教育的教材研究期 第三期 言語教育的学習指導期」というように三期に分けて発展的にとらえている。

また、書くことの歴史でも同様に「(一) 範文模倣期 (二) 自己表現期 (三) 社会的自己発見期」と三期に整理している。この三期に分けたとらえ方は、やや簡略化すぎるのではないかとも思われるが、またその反面、そこに西尾の巧みな弁証法的認識パターンをみてとることができる。「素読・解釈・批評」、「主題・構想・叙述」、「地盤・発展・完成」と位置づけた国語教育の領域構造などにおいても同様で、西尾の認識方法の根底には、つねに「三」による認識パターンがある。(略)西尾自身が晩年、自己の認識方法について、「観念的弁証法」であると語っていたということを、倉沢栄吉先生よりお聞きしたことがある⁽¹⁰⁾。

3. 講義「日本仏教史」受容の様相

西尾実には、東京帝国大学文科大学文学科在学中に受講した講義の聴講ノートが、遺されている。その内、長野県飯田市の下伊那教育会に設けられた『西尾文庫』には、合計70冊の聴講ノートが収められている。『西尾文庫蔵書目録』(下伊那教育会西尾実研究委員会編集・発行 昭和59年2月15日)の「目次」に、「十東大学生時代筆記ノート」という項がある。そして、その項には合計70冊の聴講ノートが、1から70の「番号」のもと、「ノート」の名称、「講義教授等」、「備考」の各欄ごとに整理して記載されている。

聴講ノート70冊の内、「講義教授等」欄に「村上講師」とあるものが、合計4冊ある。しかしながら、反面、「十東大学生時代筆記ノート」という項には、それ以上の言及はなかつた。4冊のノートはどのようなものなのか、また、どのような関係のもとにあるのか等々、ノート4冊の内容と接続に係わる情報は、一切記載されていない。

そこで、実際に、聴講ノートの現物に当たることにした。現物に即して、聴講ノート4冊について、各々の内容と4冊相互の接続関係を明らかにする作業に入った。結果は、すでに報告済みである⁽¹¹⁾。確認のため、以下にその概要を掲げる。

合計4冊の聴講ノートには、作業上の便宜のため、AよりDの仮称を附した。ノートCには、浄土教の史的展開が書かれていた。この点で、他の3冊とは、趣が大きく異なる。これに対して、ノートA・B・Dの3冊は、ともに、禅宗史が主題であり、しかも時系列にそって主題が展開されていた。3冊には緊密な連続性があった。その意味では、ノートCと他の3冊とは一線を画している。このことは何を物語っているのだろうか。つぎのような予想が立つ。ノートA・B・DとノートCとでは、聴講の対象が違うのではないか。別々二つの講義の聴講ノートだったのではないか。

ノートDの内容は、ノートBのそれを引き継ぐものになっている。ノートDはノートBの後に位置づけることができる。かくて、4冊の内、ノートA・ノートB・ノートDの3冊の関係が、明らかになった。即ち、ノートAの後にノートBが続き、さらには、ノートBの後にノートDが来るという順序である。繰り返すことになるが、3冊には緊密な連続性があった。

このことは、つぎなる事実からも伺えよう。ノートDの見開き第17頁の右側に「五月二十三日」という日付がつけられている。日付は、学年末の「試験論文」の課題を伝える文章の末尾に書かれていた。

1. 夢窓と足利尊氏との関係。
2. 春屋と足利義満との関係。

(妙心寺出立の由来.)

[引用者注一「(妙心寺出立の由来.)」には実線が引かれている。いわゆる見せ消ちとなっている.]

3. 関山と妙心寺

4. 夢窓と天龍寺

5. 臨済宗と曹洞宗との比較

右五冊中一論文を作成提出の事。

(五月二十三日)

ノート A は、聴講する講義の最初の部分であった。ノート D は、先に指摘したように、ノート A・ノート B に連なり、ノート 3 冊群の最後に位置していた。「試験論文」の課題の「1」から「5」に係わる事項は、すべてノート A・B・D に対応している。これらのことから、ノート A・B・D は 3 冊 1 組であり、3 冊で一つの講義をカバーしたことがわかる。

合計 4 冊のノートは、二群に分別できた。ノート A・B・D とノート C の二群である。ノート二群には、さらなる内部調査と外部調査を加えた。結果、つぎのように聴講年度を推量した。ノート A・B・D の 3 冊群は大正元年度開講の「日本仏教史 (鎌倉時代)」に、他方において、ノート C は大正 2 年度開講の「日本仏教史 (但浄土教史)」に各々対応する可能性が高いと、さらにいうと、西尾実における村上专精の講義の聴講は、二個年度にわたっていたことが推量された。村上专精の講義の聴講は、一度ではなかった、二個年度にわたって、2 度の聴講であったのではないか。2 度の聴講は、大正元年度と大正 2 年度であり、二年連続しての受講であったのではないか。

さて、ここで注目したいのは、聴講ノート D である。ノート D はノート A・B と一緒になって、一つの講義をカバーしていた。ノート 3 冊群の最後に位置していた。講義の聴講年度は、大正元年度と推量された。当時の学年暦は、9 月に始まり翌年の 7 月に終わる。ということは、大正元年度は大正元 (1912) 年 9 月より、大正 2 (1913) 年 7 月の間となる。

聴講ノート D の見開き第 17 頁の右側には、先述の通り、学年末の「試験論文」の課題を伝える文章が記されていた。学年末の「試験論文」の課題についての通告は、通常、最終講義の時間に行われることが多い。本講義の場合も、そうではなかったか。ノート記載の仕方からも、そのことが推量される。本ノートの記載は、冒頭の頁からこの頁、つまり見開き第 17 頁にいたるまで、すべて横書きで終始している。

それが、違うのである。

学年末の「試験論文」の課題を伝える箇所だけが、縦書きの表記になっているのである。当該箇所は、聴講ノート D の見開き第 17 頁、それも右側の中程に位

置する。この箇所にいるまでの表記は、繰り返すが、すべて横書きであった。当該箇所にいる直前の部分は、「梅峰 (梅峰笠信一引用者注) ハ叡山 (叡山道白一引用者注) ノ事業ヲ大ニ助ケタリ。〇〇〇〇 (この文の読字不明一引用者注)。叡山ノ下ニハ多クノ門弟ヲ出シタリ。」とある。表記は、それまでと同じく、横書きである。これは、本ノート D の第 4 章「徳川時曹洞宗」の「(4) 叡山梅峰等ノ出世 (宗統復古)」を受けたものである。第 4 節「叡山梅峰等ノ出世 (宗統復古)」は、前の頁である見開き第 16 頁から始まっていた。

学年末の「試験論文」の課題を伝える箇所は、先に示したように、聴講ノート D の見開き第 17 頁の右側の中程にあった。当該箇所が続く部分は、どうなっていたか。第 17 頁の末まで余白になっていた。これらにより、表記の違いは、つぎのように理解できよう。学年末の「試験論文」の課題を伝える文章をもって、本講義は終了したのではないか、いいかえると、講義中の記述は見開き第 17 頁で終わっていたということではないか。

だが、ノート D の記述は、見開き第 18 頁以降も続いている。この事実は、何を物語っているのだろうか。見開き第 18 頁以降分が書き込まれた時期は、いつのことか。大正 2 (1913) 年 5 月 23 日以降であろう。なぜなら、先に述べたように、聴講年度は、ノート D の場合、大正元年度 (大正元年 9 月～大正 2 年 7 月) であり、大正 2 年 5 月 23 日が本講義の講了日と推量されたからである。

書き継いだのは、西尾実自身であろう。理由は、筆跡にある。筆跡という観点から、ノート D について第 1 頁から末尾の頁まで調べたが、手の跡に一つも揺らぎはなかった。筆跡は、始めから終わりまで、一貫して変わりがなかった。同一人物のものと認められた。同一人物とは、調べ得た限り、西尾実以外は想像できない。

ノート D の見開き第 18 頁以降であるが、おそらくは、講義終了後、なんらかの事情により、西尾実が書き継いだのではないか。なんらかの事情とは、いったいどういうことだったのだろうか。かような問題意識に立って、引き続き、聴講ノート D の記載についてみていこう。

まずは、見開き第 18 頁以降に、何が書かれているのか、記載の事実を確かめよう。聴講ノート D の見開き第 18 頁の右側には、「関山慧玄と妙心寺」という題目が記されている。同題目のもとに、見出しがついている。見出しは二つである。一つは、「△ 人格と事業。」である。いま一つは、「△ 参照書目。」である。「△ 人格と事業。」の項には、加えて、つぎのような記述がある。

真正ナル事業ハ人格ノ発現也。事業ノ為メノ
事業ニアラズ。人格アリシガタメニ事業アリキ。
コレ関山ヲシテ妙心寺アラシメン所以也。

「△ 参照書目。」の項には、「本朝高僧伝 二十九」、「正
法山六祖伝」、「延宝伝燈録」、「和漢高僧伝」、「禅宗祖
師略伝」、「慧玄禅師行状」等々、合計 16 冊もの書目
名があがっている。

続いて、聴講ノート D の見開き第 19～第 20 頁に
は、「慧玄伝」という題目のもとに、「釈慧玄。号関山。
源姓信州高梨氏之子。」に始まる文章が、2 頁にわたっ
て掲げられている。「関山慧玄」に係わる伝記の抜き
書きである。典拠は「本朝高僧伝 二十九」というのも、
「慧玄伝」の末尾に、「本朝高僧伝 二十九」と記載さ
れているからである。

さらに続いて、聴講ノート D の見開き第 21 頁には、
「妙心寺」という題目のもと、寺の縁起が記されている。
末尾には、「○○○○（読字不明—引用者注）」という
記述がある。記述の出典であろう。

聴講ノート D の見開き第 18 頁以降、第 21 頁まで
の記載状況は、このようである。ここには、「関山慧
玄」という鎌倉時代後期・南北朝時代の臨済宗の僧に
係わる記述がある。「△ 人格と事業。」の項には、「真
正ナル事業ハ人格ノ発現也。」とあった。かくいう命
題のもとに、関山慧玄と妙心寺の関係、妙心寺派の祖
と法脈をとらえようとする。そのために一助となる材
料が「△ 参照書目。」にある書目一覧であり、また、
「慧玄伝」という抜き書きであり、さらにまた、「妙心
寺」の縁起資料であったのではないか。一言でいうと、
見開き第 18 頁より第 21 頁までの記載は、関山慧玄
に関する文章を制作するための準備メモの性格が色濃
い。執筆者は、もちろんのこと、西尾実自身である。

ここで、見開き第 17 頁を想起したい。ノート D の
見開き第 17 頁の右側に、学年末の「試験論文」の課
題を伝える文章が書かれていた。用意された課題は、
五つ。そのなかに、「3. 関山と妙心寺」という課題名
があった。学年末の「試験論文」の課題と、見開き第
18 頁から第 21 頁までの記述とを合わせて考えると、
西尾実が関山慧玄に関する文章を制作するための準備
メモ、という先の予想的を射ているのではないか。
このことを支持する証言がある。学年末の「試験論文」
と西尾実が提出した課題論文との関係について、つぎ
のように報告されている。「単位終了のレポートとし
て」「村上講師に『関山恵玄』を書いて提出したとい
うのである。

単位終了のレポートとして、芳賀教授に「『竹
取物語』のかぐや姫」、村上講師に「関山恵玄」・「道
元禅師」、姉崎教授に「セントベルナード」等
を書いて提出した⁽¹²⁾。

4. 「身心脱落」理解と「否定」思惟

ところがである。これにて終わりではなかった。聴
講ノート D は見開き第 21 頁が、最終頁ではなかった。
さらに続いていた。聴講ノート D の記述は、見開き
第 22 頁にも及んでいたのである。もう 1 頁分あった。
見開き第 22 頁が、本ノート D の最終頁である。最後
の第 22 頁には、何が書かれていたのか。つぎは、こ
れについてみていこう。

聴講ノート D の見開き第 22 頁右側には、つぎのよ
うに記されていた。

弁道話

△つひに大白峰の浄禅師に参して、一生参学の
大事ここに終（「終」の一字は見せ消ち—引用
者注）／をはりぬ。

△きかすや祖師のいはく（中略）又いはく。道
をみるもの道／を修すと。しるべし得道のな
かに修行すべしといふことを。／ p.21。

そして、見開き第 22 頁の左側には、このような事
柄が記載されていた。

身心脱落：△身心ナルニ注意セヨ。

△肯定ナラズ絶対ノ否定ナルニ注意
セヨ。

△超関脱落ノ語アルニ注意セヨ。

△弁道話ニ身心一如ナリト断セルニ
注意セヨ。

△学道用心集ニ名利ヲ離ルヲ菩提心
ナリト云ヘルニ注意セヨ。

△正法眼蔵随聞記ヲ読ムヲ忘ル可
ラズ。

肉ノ身否定ニアラズ心性ノ肯定ニアラズ。

吾我ノ否定也。自我ノ断滅ナリ。

（法性ヲ見タル也。神ヲ見タル也）

聴講ノート D の見開き第 22 頁の記述内容は、この
ようであった。筆跡は、それまでの頁となにひとつ変
わりがない。同じ手の跡である。西尾実の筆跡と同定
できよう。

では、ノート D の見開き第 22 頁は、なんのための
ものであったのか。講義終了後、さらに書き継ぐとい
う行為には、どんな事情があったのだろうか。ノート
D の見開き第 18 頁より第 21 頁までの記述は、いま
みてきたように、学年末の「試験論文」用として、「関
山慧玄」に関する文章を制作するための準備メモ、と
いう性格が色濃かった。また、これを支持する証言も
あった。見開き第 22 頁の書きこみも、事情はこれと
同じだったのだろうか。それとも、事情を異にしたの
だろうか。

ここで、ノート D の見開き第 22 頁に何が書かれて

いるのか、記述内容についてみてみよう。

見開き第22頁の右側には、「弁道話」という言葉が掲げられていた。「弁道話」とは、聴講ノートDの性格上、九五巻『正法眼蔵』において第一に位置する書目名であろう。このことは、「弁道話」という言葉のもとに、記載されている文章からも知ることができる。記載されている内容は、「弁道話」中の文章であるからである。

「弁道話」については、聴講ノートAに関連する記述がある。聴講ノートAは、ノートB、ノートDの3冊で一つの講義をカバーしており、3冊群のなかで巻頭の位置にあった。聴講ノートAには、見開き第1頁の左側に、墨筆にて縦書きで、「村上文学博士述／日本仏教史 巻一／（鎌倉時代）／東京帝国大学／文科大学文学科」と記されていた。

聴講ノートDの見開き第22頁の右側に戻る。ここには「弁道話」中の文章があった。最初の一句に係わる記述が、聴講ノートAにある。つぎの通りである。

正法眼蔵（九九巻）ノ弁道話中ニ「予発心求法ヨリ此方我朝遍方ニ知識ヲトモ（ママ）ラヒキ。因ニ建仁寺ノ全公ヲ見ル。相従フ霜華速カニ九回ヲヘタリト。」

〔二行空白〕

九カ年〔以下、この行、空白〕

聴講ノートD中の一句と聴講ノートAの記述は、重なりがない。だが、両者は大いに係わりがある。「弁道話」の一節に、ともに息づいているからである。即ち、一節中の前半に聴講ノートAの記述があり、後半に聴講ノートD中の一句が見出せるのである。両者は、文脈をひとつにする。それなのに、このように、別々に記載されている。

なぜなのだろうか。聴講ノートAの当該箇所が続くところに、目を留めたい。ここに、「〔二行空白〕」がある。「〔二行空白〕」とは、どういうことか。聴講中に、どんな事態が生じたのだろうか。何が考えられるか。聴講体験中の出来事について、西尾実自身の回想がある。ここには、「〔二行空白〕」という事態を示唆する証言がある。

道元の遺著にはじめて接したのは、大正初年であった。しかし、仏教に関する知識の乏しかったわたしには難解で歯が立たなかった。でありながら、その中のある部分は、わたしの心を深くとらえて忘れがたい。一読しただけで心に深く刻まれ、知らない間に暗誦してしまっているところもある。わけても彼の正法眼蔵その他の中に記されている自伝的表現は、感銘深く彼の生涯の一こま一こまを刻みつけるとともに、彼が身をもって参究した人間の真実を浮き彫りに

して余すところがない。たとえば、「正法眼蔵弁道話」の

予発心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識をとぶらひき。ちなみに建仁の全公をみる、あひしたがふ霜華、すみやかに九廻をへたり。いささか臨済の家風をきく。全公は、祖師西和尚の上足として、ひとり無上の仏法を正伝せり、あへて余輩のならぶべきにあらず。

予かさねて大宋国におもむき、知識を兩浙にとぶらひ、家風を五門にきく。つひに、大白峰の浄禅師に参じて、一生参学の大事ここにをはりぬ。

のごとき、彼が十三歳にして比叡山に登って出家し、山上の教学に精進した末、根本的な疑問を生じて十五歳山をくだり知識を諸方に求めた末建仁寺に行つて禅を参究すること九年、重ねて二十四歳宋に赴き、二十六歳天童山如浄に謁して師資深く契い、ついに身心脱落の境に至った過程を、このようにわずかな言句に感銘深く結晶させている。わたしは、大正初年東大文学科在学中、村上専精教授の日本仏教史の講義で、この一節が引用されたときの感動を今もまざまざと思い返すことができる。村上教授は、この最後を「一生参学の大事ここにをはりぬ。」と結ばれた。そんなことまで今も記憶に残っている⁽¹³⁾。

これは、回想であるが、同趣旨のことがいくども繰り返されている。少なくとも、西尾実にとっては、紛うことのない事実であったろう。とすれば、聴講ノートAの「〔二行空白〕」は、つぎのように受けとめることも可能であろう。講義では、実際に、回想のような形で、「弁道話」の一節が紹介された。けれども、「感銘」の余り、ノートに書き写す余裕がなかった。ノートできなかった箇所は、講義後に埋めるつもりで、空白のままにして置いた。だが、そのままになっていた。それが何かの事情で、空白を埋める必要に迫られた。そこで、空白の箇所を調べて、聴講ノートDの見開き第22頁の右側に書き写した。だが、疑問は残る。空白箇所を埋める際、回想に掲げたように、該当部分のすべてを書き写さなかったのか。どうして一句だけなのか。いまのところ、不明のままである。確かなことは、この一句が必要であったということであろう。この一句以外の文章については、後段で取り扱う。

聴講ノートDについて、見開き第22頁の右側は、このようであった。これに対し、見開き第22頁の左側はどのようであったか。つぎは、左側についてみていこう。「身心脱落」という言葉は、いうまでもなく、道元の術語である。左側には、「身心脱落」とはどう

いうことか、概念理解における留意事項が、掲げられている、といったような趣きに満ち溢れている。そんななかで、とりわけて注目したいのは、「否定」に言及していることである。それも、「△肯定ナラズ絶対ノ否定ナルニ注意セヨ。」のように、「注意」事項として、単なる「否定」ではなくて、「絶対ノ否定」であることが、強調されている。

他方、「道元禅師」(『信濃教育』大正3年4月号)では、「金き否定」ということが力説されていた。両者の関係は、どのようになっているのだろうか。両者の記述内容について比較検討を行う必要がある。けれども、その検証は後段で取り扱うことにして、いまは、見開き第22頁の左側が記述された時期に集注したい。なぜなら、見開き第22頁の左側と「道元禅師」との先後関係を明らかにしたいからである。

聴講ノートDの見開き第18頁より第21頁までが書き込まれた時期は、いつだったか。それは、先に述べたように、大正2(1913)年5月23日以降ではないかと推量された。これもまた、先に述べたように、見開き第18頁より第21頁までの記載は、学年末の「試験論文」用として、「関山慧玄」に関する文章を制作するための準備メモ、という性格が色濃かった。

学年末の「試験論文」の課題提示が、「五月二十三日」である。では、提出期限は、いつだったのだろうか。調べ得た範囲では、現在のところ、不明である。聴講ノートDの講義は、大正元年度の開講である。本講義と同じように、西尾実が大正元年度に受講した講義のなかに、「平安文学ノ演習」という授業がある。授業者は、芳賀矢一であった。この授業の場合も、学年末の「試験論文」が課されていた。「平安文学ノ演習」という授業用のノートは、「文学演習」(平安時代)(江戸時代)と題する。西尾実は、授業用のノートに、「試験論文」という見出しのもと、つぎのように記している⁽¹⁴⁾。

竹取物語ト今昔物語中ノ竹取伝説トノ比較
(六月二十五日迄ニ芳賀先生宅へ郵送スル事)

「平安文学ノ演習」の「試験論文」の提出期限は、「六月二十五日」であったことがわかる。提出期限は示された。課題提示の日から、どれほどの時間的余裕があったのだろうか。だが、本授業の課題提示日は、つかめていない。ただ、いくらかの類推はできる。たとえば、このようである⁽¹⁵⁾。

芳賀矢一は、当時、東京帝国大学文科大学文学科に在職していた。芳賀矢一は、文科大学文学科において、大正元年度には「平安文学ノ演習」のほかに、「文学概論」と「国文学史」の2科目を開講している。西尾実は、「文学概論」と「国文学史」の2科目、いずれとも、受講している。2科目とも、また、西尾実の聴

講ノートが遺されている。

「文学概論」用のノートには、末尾の頁に「千九百十三年五月二十八日講了ル」という記述がある。日付は、講義最終日であろう。他方、「国文学史」用のノートには、末尾の頁に「千九百十三年五月二十七日講了」と記されている。聴講ノートDの講義最終日は、前述の通り、大正二年「五月二十三日」と推量された。繰り返すが、当時の学年暦は9月に始まり、翌年の7月にいたるものであった。「千九百十三年五月二十八日」、「千九百十三年五月二十七日」、これらに大正二年「五月二十三日」、これらはいずれにおいても、大正元年度の学年末の時期に当たる。その意味において、記載の期日が講義最終日であったとしても、十分に肯える。

「文学概論」用のノートには、加えて、留意すべき記述がある。「千九百十三年五月二十八日講了ル」という記述に引き続いて、その後に「修了試験問題(六月十八日午前八時ヨリ十時)」とある。さらに、「修了試験問題」として、「日本ノ歌ニ韻ノ無キ理由ヲ述ベヨ」、「自然主義トハ何ゾ。」など合計4つの問題が提示されている。したがって、ここにいう「修了試験問題」は、「試験論文」の課題というよりも、「修了試験」用の筆記問題を指していよう。また、「(六月十八日午前八時ヨリ十時)」は、筆記試験の日時ということであろう。「試験論文」、つまりレポートと筆記試験という違いはあるが、試験日や提出期限は、大体において、六月中だったのではないかと予想される。

当該年度の最終講義日は、五月末と想定された。最終講義日に、「修了試験」の問題、学年末の「試験論文」の課題が提示されていた。そして、「修了試験」の実施日や「試験論文」の提出期限は、六月中という線が浮上してきた。「試験論文」に則していうと、課題の提示から論文提出までの時間は、およそ一ヶ月くらいであったろうか。

見開き第22頁の左側が記述された時期は、いつだったのか。この問題に立ち帰ろう。

聴講ノートDでは、見開き第17頁の右側に、「五月二十三日」という日付に添えて、学年末の「試験論文」の課題を伝える文章が書かれていた。日付は、講義の終了日と推量された。したがって、見開き第18頁以降の記載は、講義終了後の作業となる。

見開き第18頁以降の分は、第22頁までであった。第18頁から第22頁までは、内容上、二つに大別することができた。一つは第18頁から第21頁までの頁群である。いま一つは第22頁である。第18頁から第21頁の群は、学年末の「試験論文」用として、「関山慧玄」に関する文章を制作するための準備メモ、という性格を帯びていた。「試験論文」について、課題が

提示された期日と提出期限とを考え合わせてみると、論文執筆の時期としては、大正2(1913)年5月23日以降、翌月の6月中旬の間ということになるか、ということは、第18頁から第21頁までの記載事項は、この間に書きこまれたと理解できよう。

では、いま一つの頁は、どうなるか。つぎは、見開き第22頁に移る。まずは、第22頁について先述したことをまとめておこう。第22頁には、道元に係わる文章が記載されていた。見開きの右側には、道元の文章が抜き書きされていた。左側には、「身心脱落」という道元の術語について、覚書めいた事柄が認められていた。覚書ともみえる事柄のなかに、「否定」に言及した文章があった。「絶対ノ否定」ということに着眼している点で、「道元禅師」(『信濃教育』大正3年4月号)との関係が問われることになった。両者の関係は、どうなっているのか。とりわけて、見開き第22頁の左側と「道元禅師」との先後関係が、問われるとした。それには、第22頁、就中、本頁左側の執筆時期を特定する必要がある。

第22頁に先立つ、第18頁から第21頁までの記載事項は、大正2年5月23日より同年6月中旬の間に書きこまれたと理解できた。これを踏まえると、第22頁の執筆は、早くても、大正2年の6月以降になるのではないか。6月以降とは、いつ頃だろうか。さらに、考えていこう。

西尾実は、雑誌『信濃教育』の大正2年12月号に「『自』という文字」と題する論考を発表している。本論考のなかで、西尾実は「身心脱落」に言及している。調べ得た範囲では、西尾実の著作において、「身心脱落」という道元の術語が登場するのは、「『自』という文字」が最初であった。本論考の末尾に「十月十五日」という日付が付されている(6頁)。日付は原稿執筆の稿了日であろうか。「十月十五日」とは、多分に大正2年のことであろう。

論考「『自』という文字」において、「身心脱落」という術語は、つぎのように説かれている⁽¹⁶⁾。

支那天童山に於て一日終夜参禅の間、其師如浄が同室の門人を誡むる言葉を聞き、「身心脱落」なる一語に触発されて豁然として大悟した。

此時に於ける彼が悟達の内容は吾人の容易に知解すべからざるは固よりである。併乍ら彼が法性と自性との疑問といひ「身心脱落」といふあるは、又吾人の心境を以て推想し得る所があるではあるまいか。「身心脱落」呼かくして初めて自爾の法性に覚醒しうる吾等ではあるまいか。「みづから」が死して初めて「おのづから」なる我に生き得る吾等ではあるまいか。

ここにいう「彼」とは、いうまでもなく、道元をい

う。「身心脱落」は、「彼が法性と自性との疑問といひ『身心脱落』といふあるは」のように、「法性と自性との疑問」と並置される関係性のもとに置く。並置される両者は「みづから」と「おのづから」の問題としてとらえ直される。「身心脱落」の理解内容は、このようであった。「『身心脱落』呼かくして初めて自爾の法性に覚醒しうる吾等ではあるまいか。『みづから』が死して初めて『おのづから』なる我に生き得る吾等」と。ここには「みづから」対「おのづから」という認識布置のもと、「身心脱落」を理解しようとする西尾実の姿がある。

いま、留意したいのは、つぎの二点である。一つは『みづから』が死す、という発想である。そこには、自己否定の思考がある。もう一つは「みづから」と「おのづから」の関係性である。両者は、前者が「死して初めて」、後者が「生き得る」とあるように、否定を介しての関係に置かれている。

このように、「『自』という文字」という論考のなかに、「否定」の思考を認めることができる。けれども、それは弁証法とは異なる。ここには、対立がない。「みづから」と「おのづから」は、本来、対立すべきものである。それが『みづから』が死すということ契機にして、対立は回避され、『おのづから』へと回収される。

「みづから」と「おのづから」という発想は、「日本思想の基層」に息づいている。「『おのづから』を理想に、それへの『融合相即』を自己否定的に求めるといふ—『西洋の観念形態』とは明らかに異なる」発想である。西尾実の場合も、通底している。

近代日本を代表する二人の思想家(西田幾多郎・九鬼周造—引用者注)の以上の言葉に明らかかなように、ここには日本人の思想文化一般の基本発想ともいふべきものが、「自然」ということにおいて要約されて語られている。「自然法爾」あるいは「おのづから」を理想に、それへの「融合相即」を自己否定的に求めるといふ—「西洋の観念形態」とは明らかに異なる—こうした基本発想の中で、日本人は独自の思想文化を営んできたのである⁽¹⁷⁾。

「身心脱落」の理解は、「『自』という文字」の場合、「みづから」と「おのづから」という視点からの接近であった。それは「日本人の思想文化一般の基本発想ともいふべき」思惟であったといえる。

「『自』という文字」には、末尾に「十月十五日」という日付が付されていた。原稿の稿了日と推定された。西尾実において、大正2年の10月15日現在、弁証法とは一線を画していた。

聴講ノートDの見開き第22頁には、「身心脱落」

に係わって、「△肯定ナラズ絶対ノ否定ナルニ注意セヨ。」のように、「絶対ノ否定」であることが、強調されていた。また、「道元禅師」(『信濃教育』大正3年4月号)では、「全き否定」ということが力説されていた。両者は、この点で通じるところがある。だが、弁証法となると、聴講ノートDの見開き第22頁では、様相は定かではない。そうであるにしても、「絶対ノ否定」という物言いは、「『自』という文字」にはなかったものである。その意味では、「道元禅師」の近くに位置する。

聴講ノートDの見開き第22頁と「道元禅師」の関係は、どのように集約できるだろうか。第22頁の記載は、一面において、「道元禅師」執筆の以前とも考えられる。そうだとすると、第22頁は「道元禅師」執筆のための準備メモということになる。反面において、そうではないという結論も導き出すことができる。これまでのところ、両者の先後関係はつけがたい。両者の関係が明瞭にならないのは、「肯定ナラズ絶対ノ否定ナルニ注意セヨ。」ということが何を意味しているのか、未だ理解が届いていないからであろう。さらなる精査が、求められる。

(この項、続く)

<注>

- (1) 西尾実「道元禅師」『信濃教育』大正3年4月号 18頁
- (2) 杉 哲「飯田時代の西尾実(2)」『国語教育学研究誌』大阪教育大学国語教育研究室 第14号 1993年12月/杉 哲「飯田時代の西尾実(5)」『国語科教育研究論叢』九州国語教育研究懇話会 第2号 1998年3月31日
- (3) 野地潤家「西尾理論の成立と発展」(倉沢栄吉・田近洵一・湊吉正編著『教育学講座第8巻 国語教育の理論と構造』学習研究社 1979年11月27日 276頁)
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) 「道元禅師」(『信濃教育』大正3年4月号)に端を發する「否定」思惟は、その後、どのように展開したか、本課題については、杉 哲「西尾実と道元(Ⅲ)」(『熊本大学教育学部紀要』第55号 人文科学 2006年11月30日)において、その軌跡の跡を記述し、省察した。

- (6) 西尾実『国語教室の問題』古今書院 昭和15年1月25日/引用本文は昭和15年1月30日5版71~73頁によった。/なお、引用箇所は昭和14年10月15日という日付をもつ新稿の部分である。
- (7) 西尾実『国文学入門』弘文堂 昭和26年1月31日 48~49頁
- (8) 西尾実「『つれづれ草』作者の人間観と教育の問題」『日本文学の本質と国語教育』岩波書店 昭和10年3月10日/引用本文は『西尾実国語教育全集』第9巻 教育出版 昭和51年5月14日 141頁によった。
- (9) 西尾実『教師論』岩波書店 昭和12年6月10日 12~13頁
- (10) 桑原 隆「戦後国語教育史に学ぶ—生活と文化の統合的実践理論をめざして—」『月刊実践国語』教育出版センター 1986年3月号 55頁
- (11) 杉 哲「西尾実と道元」『熊本大学教育学部紀要』第49号 人文科学 2000年12月15日
- (12) 安良岡康作『西尾実の生涯と学問』三元社 2002年9月25日 60~61頁
- (13) 西尾実「正法眼藏の文体的特質」『文学』昭和38年5月 54~55頁
- (14) 西尾実の聴講ノート「文学演習」(平安時代)(江戸時代)見開き25頁
- (15) 杉 哲「西尾実と道元(VI)」『熊本大学教育学部紀要』第58号 人文科学 2009年12月4日
- (16) 西尾実「『自』という文字」『信濃教育』大正2年12月号 5頁/引用に際しては、圈点や傍点等の符号は省いた。
- (17) 竹内整一「『おのずから』と「みずから」—日本思想の基層」春秋社 2004年2月1日 8~10頁

<付記>

- ・引用文献の漢字表記は、新字体に改めた。
- ・引用文献の発行年は、文献の奥付に従った。年号あるいは西暦のどちらかに一定していない。